

京の博物館

目次

巻頭言.....	1	トピックス.....	6
おこしやす		京のかるちゃーすぽと「ひと・もの・わが館自慢」...	8
・相国寺承天閣美術館.....	2	美術館・博物館と私.....	11
・京都ギリシアローマ美術館.....	4	ティータイム.....	12

関西から

文化力
POWER OF CULTURE

巻頭言

「博物館と博物学」

京都国際マンガミュージアム館長 養老 孟司



京都国際マンガミュージアムの館長として、一年余りを勤めさせていただいている。その間に、京都という街を少し知ることになった。それ以前に気づけなかった、京都の長所が見えてきたといってもいい。関東人は基本的に京都の悪口しか知らないからである。

マンガミュージアムができたことは、その一例である。京都でなければ、そもそも作られなかったのではない。さらに京都でなければ、すでに50万人を越えるという、入館者もなかったのではなからうか。人が集まる場所だということがあるし、博物館が似合う場所ということもある。それだけではない。地元がそれを「自分のもの」として受け入れる気持ちがある。

むしろすべての人が同じ気持ちだとはいえない。でも全員一致ではあまりやりがいもないであろう。反対する人もあるから、うまくやろう、成功させようという気持ちが湧いてくる。健康な批判は、世の中をよくする。

大学に在職していたときには、博物館の長を二期勤めた。いまでもロンドンの自然史博物館には、しばしば行く。そこでしみじみ思うのは、博物館は物置ではないということである。生きて動いていなければならない。それには博物館の人が、なんらかの意味で、活動的である必要がある。

それも普通の人より活動的でなければならない。さもないと、やっぱり物置になってしまう。

活動的になるには、不貞腐れてはいけぬ。だから反対があるのは大切だと述べた。なにもいわれないということは、あまりいいことではない。多くの場合、無関心を意味するからである。博物館が無関心の対象になっては、死んでも同然である。

博物館の裏を支えるのは、博物学という学問である。これは大学で教えるような、出来上がった学ではない。私は学問の方法論だと考えている。現物を見ながら考える。だから博物学にはあらかじめの理論はない。むしろそれでしばしば馬鹿にされる。

現物を見ながら、しだいに理論ができてくる。それを思い知らせてくれるのが、博物学である。その博物学を軽視する時代が長く続いた。まだ続いているかもしれない。でも博物学という態度を馬鹿にした結果が、現在の変な社会状況を招いていると思う。

博物学はすべての学問の基礎である。私はそう信じている。歳をとれば、理屈はつねに後知恵だと、わかってくるからである。京都国際マンガミュージアムの産みの親である河合隼雄さんは「私はウソしかいいません」といわれた。言説でいくらウソをいっても、それとはべつにモノがある。モノはウソを吐かない。吐く必要がない。現代人にはそこをしっかりと考えて欲しいなあと思っている。

相国寺

承天閣美術館について

相国寺 承天閣美術館

●承天閣美術館について



承天閣玄関

相国寺（正式名称・萬年山相国承天禪寺）は、明徳3年（1392）に夢窓疎石を勧請開山、春屋妙葩を第2世とし、室町幕府三代将軍足利義満によって創建された臨済宗相国寺派の大本山です。京都五山の第二位に列せられ、絶海中津や横川景三といった五山文学を代表する禅僧や、如拙・周文・雪舟ら、歴史に名高い画僧を輩出するなど、京都の文化の中心でありました。そしてこの長い歴史の中、相国寺には中・近世の墨蹟・絵画・工芸品等多数の文化財が伝来してまいりました。

当美術館は昭和59年4月、相国寺創建600年遠諱記念事業の一環として本山相国寺・鹿苑寺（金閣）・慈照寺（銀閣）・他相国寺派寺院に伝来する美術品を受託し、保存及び展示公開、修理、研究調査、禅文化の普及を目的として建設されました。以後25年間有馬頼底館長の企画・監修のもとに中国宋・元、日本中・近世墨蹟展、絵画展、仏教美術展、茶道具展、また国際仏教文化交流展他数々の特別展を開催し、多くの方々に観覧していただいております。また収蔵文化財の調査、研究も進んでおり、現在、国宝5点、重要文化財142点、重要美術品50点他膨大な数の美術品を収納しております。

●館内のみどころ

◇第1展示室

第1展示室には「夕佳亭」の複製を常設展示しております。「夕佳亭」は鹿苑寺所在の茶室で、金閣の東北の高台に在ります。相国寺第95世鳳林承章と親交のあった金森宗和の好みで、江戸前期に成ったとされており、眼下の金閣が夕日を受けて輝く景色が「夕に佳い」ということから誰とはなしに呼ばれるようになったようです。内部には常時茶道具を展示しており、立体感あふれる茶室の醍醐味を満喫していただけます。



夕佳亭



葡萄小禽図床貼付



月夜芭蕉図床貼付

◇第2展示室

第2展示室には、近世京都画壇の奇才伊藤若冲が彩管を揮った水墨画の大作、重要文化財・鹿苑寺大書院障壁画「葡萄小禽図床貼付」と「月夜芭蕉図床貼付」を常設展示しております。若冲が鹿苑寺にこの作品を描くことになった機縁は、相国寺第113世梅莊顕常（大典禪師）と交流があったことからです。その大典の弟子龍門承猷が、宝暦9年（1759）に鹿苑寺第7世住持になった折、その記念に、大典の斡旋で大書院一連の襖絵50面（松鶴図、芭蕉叭々鳥図、菊鶏図、秋海棠図、竹図、双鶏図等）が、若冲によって描かれました。これらは水墨画の分野において全く独創的境地を確立したとされる若冲の傑作として声価の高いものです。現在、襖絵は一部修復中で完成後全面展覧する予定でございます。

◇回廊棟

回廊棟は、第1展示室と第2展示室をつなぐための通路ですが、壁面を利用して創作品やパネル等も展示できるようになっております。また「十牛の庭」を眺めながら休憩場としても利用でき、この先の東口ピーには金閣（舍利殿）の10分の1の模型を常設展示しております。

◇その他

2階の講堂は約200平米の広さで、視聴覚設備を整えております。展示会や講演会、研修会等に幅広くご利用いただけます。また1階には八畳二間の茶室夢中庵がございます。この茶室の床の間は、応永5年（1398）建立の国宝金閣の古材を使って造られたもので、茶会に御使用いただけます。

● 相国寺と伊藤若冲

相国寺は伊藤若冲と深い縁で結ばれています。若冲は先記の大典より文芸、また禅の指導も受け、大典を生涯の師としました。その事が画業に大きく影響しております。そして、大典の勧めにより明和2年（1765）

から約10年をかけて描きあげた「釈迦三尊像」3幅と「動植綵絵」30幅を、両親と弟そして自分自身の永代供養として相国寺に寄進しました。以後相国寺では毎年6月17日の「観音懺法」の折に、三門「円通閣」に掛けて法要を営んでおりましたが、天明の大火での三門の焼失後、法堂に移し、さらに文化5年（1808）からは方丈で厳修しておりました。しかし、明治22年「動植綵絵」は全て宮中に献納されました。以後この「釈迦三尊像」と「動植綵絵」は会い見えることはなく、平成19年5月に当館で開催しました「若冲展」で実に120年ぶりの再会となりました。「動植綵絵」を展示した第1展示室は去る25年前、承天閣美術館建設のおり、有馬頼底館長が、「動植綵絵」30幅の里帰り展が将来開催されたとき、相国寺の「釈迦三尊像」と一堂で掛けられるように設計したという経緯がございます。正面に「釈迦三尊像」3幅、左右に「動植綵絵」30幅と、江戸時代の懺法法要の配列と同様の展示とし、開催期間中多くの方々に御清覧いただきました。

平成20年、日本とフランスは交流150周年を迎え、また、京都市とパリ市におきましても1958年「京都・パリ友情盟約」（姉妹都市）締結以来50周年の年となりました。これを記念して10月16日から12月14日まで、プチ・パレ美術館におきまして、「相国寺・金閣・銀閣名宝展」を開催いたしました。春からは承天閣に於いて、帰国展を開催する予定でございます。

皆様の御高覧をお待ち申し上げます。

相国寺承天閣美術館
事務局長 鈴木景雲

所在地/〒602-0898

京都市上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町七〇一
TEL (075) 241-0423 FAX (075) 212-3585

交通/●JR京都駅より 京都市営地下鉄

「今出川駅」下車3番出口より徒歩8分

●阪急電車烏丸駅より 京都市営地下鉄

「今出川駅」下車3番出口より徒歩8分

●京阪電車「出町柳駅」下車

3番出口より徒歩20分

●市バス201・203号系統

「同志社前」下車徒歩6分

開館時間/午前10時～午後5時（入館は4時30分まで）

休館日/年末年始・展示替期間

拝観料/一般800円、65歳以上・大学生600円、

中・高生300円、小学生200円

（一般の方のみ20名様以上は、100円割引させていただきます。）

ホームページ

<http://www.shokoku-ji.or.jp/jotenkaku/index.html>

ヨーロッパ美術のルーツを探る

京都ギリシアローマ美術館

● はじめに

「京都ギリシアローマ美術館」は、古代ギリシアローマに魅せられた蜷川 明・妻岸子の40年にわたるコレクションです。未長く保存するとともに一般に公開するため、京都コンサートホール近くの閑静な住宅街に美術館を建設し、平成9年（1997）4月に開館しました。

● 創設に至るまで

私の先々代にみかわのむすねの蜷川式胤は、明治新政府の内務、外務、文部各省の要職に就き、新しい諸制度の確立に努めました。明治5年、初めて奈良正倉院の扉を開いて、学術調査を行い、明治6年には美術品の海外流出を防ぐため、国宝の指定制度や東京、京都に国立博物館を設ける必要性を政府に説くなど、博物館の設立に献身しました。著書に日本六古窯を解説した『観古図説』、『徴古図説』、『好古図説』、『古今沿革図集』があり、自邸内に陶器館を設け、東西の美術品を蒐集して広く一般に公開することで、当時の美術研究に寄与しました。またドイツのライプツヒ国立博物館やアメリカのボストン美術館に120点の日本の陶磁器を寄贈するなど、文化交流に尽しました。

先代の第一ていけいは京都仁和寺窯を発掘、野々村仁清の研究を深め、美術史家として活躍しました。東西の古陶の蒐集、公開もまた先代を引き継ぐものでした。

私は西欧美術の源流となった古代ギリシア美術に魅せられ、同美術を中心に、エトルリア、ローマの陶器、大理石彫刻、石棺、コインなどを蒐集しました。また、学問的な裏付けを大切にしながら学術文化の向上に微力を尽くしたいと考え、父祖にならい、昭和47年倉敷の地に『倉敷蜷川美術館』を設立しました。収蔵品を広く一般に公開するとともに、歴史的な内容の充実にも鋭意努めて参りました。一方、父祖の地、生家の地



外観

である京都では、いつかギリシアローマの美術品を一堂に集め、皆様方に楽しく鑑賞していただきたいと念願していました。

平成9年、ようやく、明治の初めから京都の蜷川家父祖三代にわたって蒐集した美術品のうち、古代ギリシア美術を展示した「京都ギリシアローマ美術館」開館の運びとなり、倉敷の美術館を閉鎖しました。未長く全美術品の保存を目的とし、またその破損、紛失、盗難を防ぎ、「人類の宝」ともいわれる古代ギリシアエトルリア、ローマの数々の美術品を、系統的に見ることができる日本唯一の美術館として、一般鑑賞は勿論、学術研究のお役に立ちたいと願っています。



陶工ヒエロンと陶画家マクロン（内面）の酒杯 BC490年

● 当館の展示について

古代ギリシアは、人類史の中でももっとも輝かしい美術文化を築き上げました。その美術は現代西洋美術の源流となり、シルクロードを通して東洋にも強い影響を与えました。この美術館では、紀元前3,000年から紀元後200年頃まで約3,200年の古代ギリシアの歴史の流れにそって、彫刻・陶器・装身具・武具・祭器品・奉納品・等身大大理石彫刻・モザイク・テラコッタ塑像など150点を展示しています。またクラシック・ヘレニズム各時代に渉る壺絵のコレクション約100点を展示しており、同時代の美術史の流れを一望することができます。所蔵品のすべては、ヨーロッパ考古学の第一人者に鑑定を受け、解説を頂いています。



1階中央（玄関）ホール

◇ 1階ホール

建物の中に入ると、等身大のヘラクレス大理石が正面にあり、紀元前300年頃のギリシア女神のモザイクミュージュの大理石彫刻、初代ローマ皇帝アウグストゥスの胸像などが展示されています。らせん階段を上がると展示物を別の角度から眺めることもできますので、前後、上からの展示をお楽しみいただけます。

◇ 2階・3階「展示室」

2階から3階展示室には、2700年前のエトルリアのおしゃれなネックレス、ブロンズの兜、槍、ベルト、馬の首飾りなど日常生活用品を見ることができます。また黒絵式、赤絵式の壺に描かれた生活の様子、神話物語の絵模様が目を楽しませます。

◇ 京都ギリシアローマ美術館にご来館下さい

アプローチからは、レモンやオリーブの木や庭園もお楽しみいただけます。また、4階休憩室からは、比

叡山や五山送り火の「大文字」, 「妙・法」, 「舟形」が一望できます。広々としたテラスでは鮮やかな花を見ることができ、茶室や中庭を眺めながらの喫茶もお楽しみいただけます。ミュージアムショップでは、ギリシアの雑貨も充実しています。さらに、一年を通じ、イベントとして年4回～5回学術的な講演会を開催しており、予約いただければ参加することができます。

過ぎ去った人類の栄光に思いを馳せながら歴史の跡をたどっていただければ幸いです。ご来館を心よりお待ちしております。

京都ギリシアローマ美術館
館主 蛭川 明



馬車に乗ろうとするディオニソスの出発図
アンティメネスの画家 BC520年

所在地 / 〒606—0831

京都市左京区下鴨北園町 1—72

TEL (075)791-3561

FAX (075)702-3118

交通/●JR京都駅より

京都市営地下鉄「北山駅」下車徒歩10分

●市バス

1・204・205・206・北8号系統

「洛北高校前」下車徒歩8分

4号系統「北園町」下車徒歩2分

開館時間/10:00~17:00

休館日/月曜日(祝日の場合は翌日),

1月~2月

料金/一般1,000円, 中・高生600円, 小学生300円

京博連職員研修交流会

京博連加盟館職員の研修と相互連携を目指すため、今年度も9月12日(金)に京都ロイヤルホテル&スパにて職員研修交流会を実施しました。

花園大学歴史博物館長 芳井敬郎様から「今、博物館が取り組むことは - 経験と実感より - 」と題する御講演の後、交流会を開催しました。

今後も、継続して実施しますので、自己研鑽・他館の学芸員の方との交流のため、是非多くの方に参加していただきたいと思ひます。



「博物館ふれあいボランティア養成講座」スタート!

京博連加盟館において、活躍している「博物館ふれあいボランティア」の養成講座を、5年ぶりに再開しました。5カ年計画で、毎年約50名を養成します。昨年8月に受講生を募集し、定員を上回る76名の方から御応募いただき、書類選考で選ばれた方々が、熱心に受講されています。現在、養成講座第6回のうち3回が終了しました。

第1講は、花園大学副学長の芳井敬郎先生から「博物館とは」というテーマで、博物館の概要や保管、展示の仕方など博物館の裏側を支えるご苦労についてもお話いただきました。

第2講は月桂冠大倉記念館の御協力により、龍谷大学社会学部教授の筒井のり子先生から「ボランティアとは」というテーマで、いろんな角度からボランティア活動をとらえ、多くのことを気付かせていただきました。

第3講は学校歴史博物館の御協力により、京都ホスピタリティ研究所代表の友澤弘先生から、永年のホテル勤務で培われたおもてなしの精神について、サービスとホスピタリティの違いを歴史的背景をまじえながら教えていただきました。

また、先輩ボランティアの虹の会の方からの体験談や施設見学を通して、博物館ふれあいボランティアがより具体的なものとなり、「博物館と来館者との架け橋」になれるよう、来年4月以降に加盟館で活動することを心待ちに学ばれています。



養成講座カリキュラム

※時間はいずれも午後1時30分～4時30分(受付1時から)

	日程	会場	内容・講師
第1講	10/20(月)	京都アスニー	開講式/講座「博物館とは」:芳井敬郎氏(花園大学副学長)
第2講	11/17(月)	月桂冠大倉記念館	講座「ボランティアとは」:筒井のり子氏(龍谷大学教授) /現役ボランティアからの体験談①
第3講	12/11(木)	学校歴史博物館	講座「おもてなしについて」:友澤弘氏(京都ホスピタリティ研究所代表) /現役ボランティアからの体験談②
第4講	1/20(火)	京都アスニー	ワークショップ/ 一瀬和夫氏(京都橘大学教授), 染川香澄氏(ハンズ・オン プランニング代表)
第5講	2/16(月)		
第6講	3/11(火)	泉屋博古館	ボランティア導入館からの業務説明 /ボランティア活動見学等/修了式

○京都市博物館連続公開講座○

毎年多くの市民の方に御参加いただいています、博物館連続公開講座を今年度も全5回開催いたします。
今回は既に実施された第1～3回の講座について御紹介いたします。

第1回 10月24日(金) 泉涌寺 心照殿

講演：「泉涌寺とイダ天」

泉涌寺心照殿 学芸員 西谷 功 氏

今年度、第1回目の講座を泉涌寺心照殿において開催しました。泉涌寺の歴史や韋駄天にまつわる伝承など興味深いお話をお聞かせいただいた後、宝物館である心照殿だけでなく舍利殿や楊貴妃観音堂を解説いただきながら見学し、非常に充実した講座となりました。



詳しい解説を受けながらの
舍利殿見学の様子

第2回 11月18日(火) 京都御苑

講演：「京都御苑の森と源氏物語の土御門第」

京都御苑管理事務所 所長 小沢 晴司 氏

歴史解説をお聞きしながら、紅葉に赤く色づき始めた京都御苑内(閑院宮邸跡建物、拾翠亭等)を散策した後、京都御所の参観をしました。1300年の京都の歴史の息吹と、豊かな自然をごく身近に感じ貴重な体験をすることができました。



苑内を散策する中、歴史解説に
聞き入る参加者

第3回 12月3日(水) 京都大学総合博物館

講演：「京都大学の『フィールドワーク』の歴史」

京都大学総合博物館 教授 大野 照文 氏

スライドやビデオを拝見しながら旧制三高にまで遡り、京都大学の現地・現場での研究について御講演いただきました。講演後も、企画展「シルクロード発掘70年ー雲岡石窟からガンダーラまでー」を含め総合博物館を解説いただきながら見学し、研究の奥深さに触れることができました。



ユーモアを交えながらのわかりやすい
講演でした

第14回ミュージアムロード

「知ったはる？ほんまもんの京都」

期間：平成20年1月31日(土)～3月22日(日)

<各会場により、期間が異なります>参加館：52館 会場：市内51館

第14回ミュージアムロードは、9月から榊原吉郎相談役を座長とする企画委員会にて検討を重ねてきました。

今回は、「知ったはる？ほんまもんの京都」をテーマに各会場館において、2ヶ月余りの間、市民や観光客の皆様いろいろな分野の「京都のほんまもん」を見て、知って、体験していただきます。

今回も、各会場をつなぐスタンプラリーを実施し、京都市内博物館ガイドブック「京のかるちゃーすぽっと」をはじめ、各会場館から御提供いただいた素敵な商品が当たるプレゼント企画もあります。

今回は、参加館も52館になり、当該事業が新たな「京の冬の風物詩」となるべく充実をはかっていきたいと思っております。



<前回の
開催風景>



新規加盟館の紹介

◆ 山口家住宅 苔香居

〒615-8274 京都市西京区山田上ノ町25番地 TEL：(075) 392-4533

URL <http://www.taikoukyo.com>

◆ 黎明教会資料研修館

〒606-8342 京都市左京区吉田神楽岡町3-6 TEL：(075) 751-0369

URL <http://www.reimei.or.jp/arts/index.html>

京都市考古資料館

京都市考古資料館 副館長 村木 節也

わが館を紹介



外観と西陣の碑

延暦13年（794）桓武天皇により京都に都が定められてから、京都は日本の政治、経済、文化の中心地として栄え、また、その歴史的遺産は美しい自然と合わせて日本人の心のふるさととして親しまれています。

一方、地中には、遠く原始の世界から平安時代を経て近代に至る各時代の遺構や遺物が埋もれています。

京都市考古資料館は、京都市内の発掘調査により発見された、各時代の貴重な考古資料を広く市民の皆さんに展示公開するため、昭和54年11月に開館しました。

展示では、各時代を代表する遺跡写真や当時の生活の様子を語る出土品を組み合わせるとともに、遺構の型取り模型や土層の剥取り模型などを活用することにより、埋蔵文化財から見た京都の歴史をより、解かりやすく展示するよう、企画しています。

また地域の埋蔵文化財が、身近に感じられるような文化財講座や夏期教室などの普及事業を通じて、皆さんが見て触れて、参加できる生涯学習施設としても活用して頂けます。なお、建物は、大正3年（1914）建築の旧西陣織物館で、京都市登録有形文化財に登録されています。

わが館ひと自慢

「ひと」ありて 考古学あり

発掘調査では出土した遺構を一面一面、人の目で見極めて調査して行きます。その後の整理作業も、かなり機械化が進んだとはいえ、まだまだ、手作業で行っています。そして、このような地道な作業を経て、展示施設での展示、公開を行います。京都市考古資料館の展示でも、こうした「手作り」を大切に、解りやすい展示を心懸けています。

考古学は、今でも「ひと」の世界です。



展示風景

わが館もの自慢

豊楽殿出土品の数々



豊楽殿出土品

平安宮の中心施設である朝堂院の西隣に設けられた国家の饗宴施設が豊楽院で、その正殿が豊楽殿です。豊楽殿は、大嘗会や年中の諸節会などの饗宴の場として使用され、また、外国使節の謁見や饗応なども行われました。昭和62年の発掘調査で、豊楽殿基壇跡の北西部分が見つかり、豊楽殿の建物規模と位置を確定することができました。また、豊楽殿の屋根を飾っていた緑釉の鴟尾や鬼瓦などの瓦類を中心に、数多くの遺物が出土しています。平成17年6月、これらの出土品を中心とした674点が、京都市所有の有形文化財美術工芸品「考古資料」として、初めて国の重要文化財に指定されました。現在、これら重要文化財の主要な出土品は、考古資料館の「テーマ展示コーナー」を中心に展示しています。

- 所在地/〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入ル 元伊佐町265-1 TEL (075)432-3245
- 交通/市バス「堀川今出川」, 「今出川大宮」下車
- 開館時間/9:00~17:00 休館日/月曜日(祝日の場合は翌日), 年末年始
- 料金/無料
- ホームページ/<http://www.kyoto-arc.or.jp/siryokan01.html>

友禅美術館 古代友禅苑

美術館担当部長 新矢 敏夫

わが館を紹介

華やかに様々の模様を染める京友禅は、世界に誇る伝統工芸であり、日本の民族衣装とも言えるでしょう。古代友禅苑は京友禅の美と伝統に多くの方々親しんで頂くため、昭和51年（1976）、4月に設立致しました。

苑内1階には江戸～明治期にかけての古典衣装や十数年がかりで復元された小袖、当苑で手がけた友禅染の着物などが常時展示され、過去より現在に至る日本の着物の美を満喫して頂けます。

3階には手描友禅の工程、『手挿し』の作業を見学できる工房や、染に関わる資料の展示、型友禅の体験ができる「友禅手作りコーナー」があります。また希望者には、友禅染の歴史や沿革を紹介する映画の上映も随時行っております。



1階展示風景

わが館ひと自慢

元禄のマルチ・デザイナー 宮崎 友禅斎



知恩院にある「宮崎友禅斎の銅像」

友禅染は元禄時代、扇絵師であった宮崎友禅斎によりはじめられたのでそのように呼ばれています。斬新奇抜なデザインの模様染めで、世の衆目を集めた友禅斎。彼の扇子は大変な人気で飛ぶように売れたそうです。

それに着目したある呉服屋が着物の柄にして染めるように申したところ、友禅斎は苦心の末に友禅染を作り上げ、それが大評判を呼び、またたく間に世間に広まってきました。

また彼は様々なジャンルのデザインを試みています。扇絵や小袖模様はもちろんのこと、帯・風呂敷・手拭い・袱紗・香包・鼻紙包・匂袋・挿櫛・杯・盆・短冊箱・沈香箱・伽羅箱・文箱・火桶・針さし・表具物・軸物・書物の表紙・団扇までを手がけ、今でいうマルチ・デザイナーだったのです。

晩年には糊絵といわれる友禅染の絵画に力を注ぎ、なかには表装の裂の模様まで友禅染した掛け軸もありました。

異色あるものに陶画があげられます。祇園に住み金沢で余生を送った彼にとって、清水焼や九谷焼の上絵は日頃の手すさびだったのでしょう。溪流に橋の図や菖蒲の図の染付茶碗、若松の図の染付一輪挿し、獅子の図の菓子器などが残っています。

わが館もの自慢

当苑オリジナルの友禅染作品

伝統ある小紋染も、最近ではその技術の保存が危ぶまれています。この染技を後世に伝えようと十数年前より、四季折々の京の風物詩に託して、20点程の着物を創作致しました。小紋は普通、着尺仕立のものですが、手描友禅と併用して絵羽に表しました。

春は桜、夏は祇園祭、秋は紅葉、冬は雪景色など、様々な京の名所や行事を描いた着物を季節ごとに展示しています。



「霧に咽ぶ晩秋の嵐山」

- 所在地/〒600-8354 京都市下京区高辻通猪熊西入ル 十文字町 TEL (075)823-0500
- 交通/市バス「堀川松原」, 「大宮松原」下車, 阪急電鉄「大宮駅」下車 徒歩8分
- 開館時間 /9:00～17:00 (友禅染体験受付は16:00まで) ●休館日/年末年始
- 料金/一般500円, 中・高・大学生400円, 小学生250円

黎明教会資料研修館

黎明教会資料研修館
栗田 光雄

わが館を紹介



外観

「心の獣性を和らげ、魂を向上させることが高い芸術の感化によってできる」という教祖・岡田茂吉の教えのもとに、黎明教会初代会長・多田光行は1970年代から琳派の作品の収集を始め、1982年に小さな美術資料展示室を開設しました。その後、2004年9月に現在地に規模をやや拡張して開設したものが当館です。当館は資料研修館と名づけられておりますが、琳派を中心に、奈良時代～近現代までの美術品を収蔵し、季節やテーマ別に年に6～7回の陳列替をしながら、所蔵品を中心に常時40～50点ほどの作品を展示している美術館です。教祖の書画も愛好家が多く、常時展覧しております。さらに各種美術書を自由に閲覧できる開架式図書室、立礼席を

併設した茶室、ワークショップなどに利用可能な会議室、庭を見ながら飲食できる休憩室、オリジナルグッズを揃えたミュージアムショップなどの施設を備えております。大文字山を正面に仰ぐ吉田山の東麓、神楽岡通に面したバリアフリーの当館に、付近の観光の合間にもお立ち寄りいただくと幸甚です。

わが館ひと自慢

当館ボランティアスタッフ一同

当館の運営は主にボランティアスタッフの協力により成り立っています。静かな雰囲気の中で、観覧の方々が、それぞれの思いで芸術品との時を過ごしていただけるように、スタッフ一同が心がけております。ご要望により作品の説明や館内施設のご案内をさせていただいたり、施設内外の整理や清掃など、それぞれのスタッフの得意分野が有機的に絡み合っており、穏やかな空間を醸し出しています。



茶室

わが館もの自慢

琳派の作品



展示室

当館のコレクションの中心は尾形光琳をはじめ、本阿弥光悦、宗達、尾形乾山などの琳派の作品です。16世紀に京都に生まれた琳派は世界のRIMPAとなり、その作品は今なお人々の心を惹きつけています。所蔵品の中には、光琳の燕子花・桔梗図屏風、光悦の詩歌巻、宗達の蓮花図、乾山の色絵蔦図香合など、各種図録に収録されている収蔵品も多くあります。しかし、琳派を中心とした作品を常時展示している美術館が少ない中で、何か一点の作品を取り上げるよりも、数多くの作品を通して世界の人々の心を動かしてきた琳派の普遍的な文化力の源を少しでも紹介していくことが大事だと考え、それにむけて努力しております。

- 所在地/〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町3-6 TEL (075)751-0369
- 交通/市バス「銀閣寺道」下車、神楽岡通を南へ徒歩8分
- 開館時間/10:00～16:00 休館日/不定休（ホームページにてご確認ください、事前連絡ある場合は開館します。）
- 料金/無料
- ホームページ/ <http://www.reimei.or.jp/arts/index.html> e-メール/ art@reimei.or.jp

京の匠の技と伝統を無料体感

京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」
大下 靖子

「風呂敷が一万円？」 京都伝統産業ふれあい館には、美しい展示品の夫々にキャプションが付けられ、カラフルなパンフレットには完成までの工程が解り易く丁寧に解説されている。どの一点にも匠達の技と思いが込められいつまでも見飽きない。なかでも驚嘆したのが、京友禅と京鹿の子絞り。どちらも十以上の工程を夫々の職人たちの手練の技が請負って次へ手渡されていく。その手間暇と技に一万円と納得する。江戸の全盛期には職人町が形成され、運び屋といわれる人達もいた。だが今は着物離れ。生活の保障がない為の後継者不足。プリントされた安い輸入品の影響等で種類や職人さんたちも減っていき、今では半数以下になっていると云う。「ここに来る度に市民税払っているのが惜しくない。」との声も。京の〇〇と名付けられた伝統工芸の数々が今日の文化を支え、伝統に根付き引き継がれていってほしいと来る度に思い知らされる素敵な空間です。



楽しみな宝鏡寺

京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」
久須美 宣子

春のお雛様、秋は庭園の紅葉。街中にこんなに静かな所もあるのかと、不思議な気がする門跡寺院「宝鏡寺」。百々御所と呼ばれ皇女和宮様がお遊びになつたと云う、手入れの行き届いた上品な鶴亀のお庭。又本堂前のお庭には天皇より賜った樹木や椿の原種と云われる村娘、百人一首に詠まれた奈良の都の八重桜、そして光格天皇よりの伊勢撫子など歴史が感じられる。人形寺と親しまれているように孝明天



皇女和宮様

皇御遺愛の御所人形「孝明さん」をはじめ、御所より入寺された皇女方に贈られた由緒あるお雛様などが展示されている。珍しい「猩々」と云う三徳地院宮様が父君の光格天皇より賜ったお人形には、疱瘡除けのおまじないに使われたと思うと、粗末にはできない。10月14日に人形供養祭が盛大に行われるのも頷ける。書院の円山応震作「四季耕作図」の襖絵は、座って見る位置に描かれており、季節感が素晴らしい。阿弥陀堂に祀られている日野富子像もさすが貴祿といった感で、訪ねる度に楽しませて頂けるお寺である。



人形供養塚

美しく素晴らしい時代祭展

京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」
南 和子

私は博物館ふれあいボランティア活動に参加して10年になり、多くの館で生涯学習の機会を得て楽しく学ばせて貰っています。

京都伝統産業ふれあい館ギャラリーでは、平成20年4月～21年12月まで（別の展示期間あり）全14回に分けて「時代祭展」が開催されています。

時代祭の衣装、祭具、調度品等は厳密な時代考証によって復元されています。繊細で豪華な京都の伝統工芸の技が間近に見られる又とない機会です。素晴らしい展示です。

特に婦人列伝（全）の衣装は美しく、歴史上のヒロイン達の豪華絢爛な衣装とその波乱万丈の生涯を重ね創造しながら皆様鑑賞して下さいます。私も共感しながらの語りは楽しい一時です。

平安講社の皆様が解説に来て下さり、歴史・ご苦労等お話し下さり喜んで頂いています。その情熱と心意気によって時代祭が継承されていることに感謝します。





いざ、平常展示館建て替えへ

京都国立博物館・学芸部・企画室長
京博連幹事 赤尾栄慶

昨年12月7日をもって、昭和40年（1965）に竣工し、翌昭和41年から平常展示館として使用してきた当館の新館が閉鎖され、使用を始めてから42年でその役目を終えた。もちろん、それは新平常展示館を建設するためであるが、耐震性やバリアーフリーなどの問題から、長らく建て替えが望まれていたものである。

ご存知のように、昭和41年に開館した新館は、1階には考古・陶磁・彫刻の7室があり、2階には仏画・水墨画・絵巻・障壁画・中国画・書跡・染織・漆工・金工に特別陳列用の中央室の10室、上下合わせて17室からなっていた。私は、20年以上にわたって新館2階13号室の書跡の展示室を使用してきたが、学芸員の立場から見ると、実に使いやすい展示室であったと思っている。

まず、壁付ケースのガラス面の開閉については、棧を出し入れして行うものであることから、展示替えなどの際にはガラス面を左右のいずれかに移動させて作品の正面で展示作業ができる、これは卷子本などを展示する際には本当に有難い構造であった—もちろん、取り扱いの上での事故のリスクも本当に小さい—。次に何年か後に隣の絵画の展示室を使った時にわかったことであるが、書跡の展示室よりも奥行きやガラス面の高さが大きくなっていることに気付かされた。書跡は、古筆の仮名などがあることから、奥行きがやや狭くなっており、ガラス面もその高さが絵画より低くなっていたのだ。設計に関わった方々の工夫に気づかされた瞬間であった。

博物館や美術館にとっては、特別展覧会は云うに及ばず、普段の平常展示こそが学芸員にとっての企



平常展示館全景

画展示であり、常の学芸員の研鑽ぶりが問われるといっても過言ではない。当館では、特別展覧会中の平常陳列につい力が入ってしまう。それ故、特別展覧会開催中の平常陳列の充実ぶりにしばしばお褒めの言葉をいただいた記憶がある。

特に日本美術を取り扱う博物館や美術館は、脆弱な材質の文化財を保護するために展示替えをすることが必須条件となることから、展示ケースに関しては作業のしやすさが望まれる。それが文化財の公開と保護のバランスを保つ重要な鍵の一つになると思われる。

建て替えの工事期間は5年とやや長い。現在の新館を取り壊して、その跡地に新平常展示館を建設することから、やむを得ないことであろう。5年後には、世塵を払うような空間であり、学芸員にもやさしく、入館者にもやさしい展示館ができることを念願している。

もちろん、工事期間中は、赤レンガの本館で特別展覧会を中心に開館します。

発行 平成 21年 1月

編集・発行者 京都市内博物館施設連絡協議会事務局（京都市教育委員会生涯学習部内）

所在地 〒604-8571 京都市中京区富小路六角下 元生祥小学校内 TEL075-251-0410 FAX075-213-4650

ホームページ http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/soshiki/29-17-1-0-0_5.html

「京博連だより」に対するご意見・ご感想をお待ちしています。